TSS 文化大学一般教養講座
平成 27 年 2 月 17 日 10：00～
於 TSS 新館 9 階スタジオ

・・・我が国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は未来に誤ち無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止めます。(「戦後 50 周年の終戦記念に当たって」村山総理大臣談話より)

幸運な引揚者

岡 本 敏 一
(広島大学名誉教授)

はじめに

今年は戦後 70 周年です。敗戦を直接見聞きした生存者がいなくなりつつあります。敗戦の風化を少しでも留め置くために、私のささやかな引き揚げ体験をお示ししたいと思います。

私は四歳から五歳にかけて満州から引き揚げてきました。それで、満州を軸に、中国東北部における日本の振る舞いを、時系列で述べ、私のささやかな引き揚げ体験を語り、最後にこの体験を纏めて考えたことを簡単に触れたいと思います。

TSS 文化大学で講演する著者

満州の位置

満州は現在の中国東北 3 省（遼寧省、吉林省、黒竜江省）で黒竜江省の省都である哈爾浜（ハルピン）は稚内の北、南端の旅順は仙台とほぼ同緯度になります。満州は日本が侵出した当時は、清帝国の東北部でした。

清の歴史

清帝国は、1583 年愛新覚羅ヌルハチが女真族を統一し、国号を 1636 年に清としました。17C 後半康熙帝の時にはロシアの南下を押し戻し、18C 乾隆帝の時最大版図となり、朝貢体制を敷いて朝鮮、インドシナを支配下に置きました。

19C 後半なりますと、清はイギリスに香港、九龍を割譲させられ、フランスにインドシナを植民地化され、ロシアには黒竜江まで侵出され沿海州を領有されます。このような北東アジアの状況の中、日本は明治維新を迎え、**ロシアを最も警戒**しました。

日清戦争（1894~95）で、朝鮮と清の宗主関係を解消させ、多額の賠償金と台湾の割譲を得ましたが、遼東半島は三国干渉でロシアが租借することにされた上、満州地域をロシアに占領され、日露戦争（'04~'05）を起こしその結果、関東州（旅順・大連）の租借、東清鉄道の譲渡（旅順長春間の鉄道とその付属地とその運営警備（鉄道守備隊）、採炭、森林伐採、漁業権などの権益を含む）、南樺太の割譲を受けました。'06 に日本はこの権益を運営するため国策会社「南満州鉄道株式会社」を設立し、**満州は日本の生命線**となっていきました。

大連　旧満鉄本社　今も鉄道関係の役所に使用している。

'10 に韓国を併合し、'11 に辛亥革命で中華民国が成立し、'12 には日本は大正となります。

第一次世界大戦（'14~'18）中の　'15 に 21 箇条の要求を中国新政府に突きつけ、関東州の租借期間を 99 年とし、南満州での鉄道敷設権・鉱山採掘権・土地賃借権などを飲ませました。

'17 にロシア革命が起き、日本軍は長期にわたって('18~25)シベリヤに、在満部隊を派遣し続けましたが、敗退しました。このときからこの部隊が関東軍を名乗ります。

'28 には張作霖を、奉天付近で爆殺しました。'31 には奉天近くの鉄道を関東軍が爆破するという「柳条湖事件」を起こし、全満州を占拠し、新国家樹立を目指しました。これをきっかけに'33 まで続く「満州事変」となり、**満州を日本の支配下に置こう**としました。この軍事行動は日本国が承認しない行動で、資金はアヘンの専売によりました。またこの事変では、関東軍は新聞を大いに利用し「号外」を乱発させましたので、「毎日新聞社後援、関東軍主催の満州戦争」といわれました。長引く事変で列国の注目が満州に集まるのをそらすための謀略として、邦人保護を名目に「上海事変（'32.1)」を起こしました。中国の思わぬ抵抗に遭いこれも長引きましたが、国際連盟の勧告により戦闘が中止されました。その二日前に**満州国建国宣言**（'32.3）がなされました。

瀋陽（旧奉天）　918 戦争記念館のモニュメント
中国では柳条湖事件が日中戦争の始まりとしています。

このときの満州国は、表向きは執政溥儀（清国最後の皇帝）と東北 4 軍閥による政府で、王道楽土・五族（漢・満・朝・蒙・日）共和を標榜しましたが、実体は関東軍の傀儡で権力は日本（人）にありました。

日本ではこの年の 5 月に 5,15 事件が起き、満州国承認を渋っていた、犬養毅首相が殺害され、政党政治は終焉し、ファシズムが始まりました。これにより満州国が衆議院で承認され、戦費が出ることになりました。戦争は財政（戦費）・軍事力・国民の支持がないとできません。政府と国民をつなぐジャーナリズムが「毎日新聞社後援、

満州国の切手　左上: '33.3 発行『建国一周年記念』、右上: '37 年発行の通郵切手（中国が満州を認めないので、流通させるため国名がない）
下 2 枚は'42 年発行の『建国十周年記念』左は五族の少女、右は国旗

関東軍主催の満州戦争」といわれるようでは、この動きは止められません。

この年の 10 月に満州での日本の武力行使が侵略に当たるとするリットン調査団の報告が国際連盟に出され、日本は翌'33.3 に国際連盟を脱退しました。そして 5 月にようやく満州事変が終結し,'34.3 に満州帝国が成立しました。満州帝国は面積 130 万平方㎞（日本の 3.4 倍）で人口は 3862 万人でした。

満州における日本（人）の土地収奪　満蒙開拓団

日本は対華 21 箇条要求の「土地賃借権（実質は所有権）」で満州事変（'31 年）までに佐賀県より広い面積を取得しました。'27~'30 日本は金融など大不況の中、人口は過剰となり、農村は疲弊し、農家の次三男対策が求められ、満蒙開拓団が送り出されました。はじめは（'32~'34）在郷号軍人で組織された武装移民で、軍や警察は「反日」と判断したらその場で殺害できるとする「臨陣格殺」という法律で守られました。このため'34.3 に、農民 1 万人が二ヶ月にわたって日本人入植地を取り囲み、関東軍が出動して数ヶ月かけて 5000 人を殺害するという土龍山事件が起きています。

'36 には、20 年間に 100 万戸 500 万人の移民計画が策定され、分郷分村による満蒙開拓団が満州に送られました。また関東軍が抑える点と点をつなぎ、反満抗日ゲリラを分断排除する屯田兵的な役割を持つ義勇軍開拓団（青少年義勇軍）が 1935 年から組織され、終戦までに 250 団、10 万名満州に送られました。武装移民や義勇開拓団は独身男性で構成されていたので、「大陸の花嫁」が送られました。開拓団等が入手した土地は'41 には 20 万平方㎞（日本本土の 53%に相当）でそのうち 18%　3.5 千平方㎞（当時の日本の全耕地の六割弱に相当）は中国・朝鮮人が開いた既耕地でした。

中国人を犠牲にした産業開発

良質の石炭を露天掘りで採掘できる撫順炭鉱では常時 4 万人の中国人が働いていましたが、その 6 割を毎年補充しなければならないほど劣悪な労働環境でした。他の鉱山も同様でした。それで'40 頃には中国から満州に 89 万人の流入があり、さらに 42 万人を強制連行してきました。このような状況の中で、'32.9 に、平頂山事件が起きました。反満抗日ゲリラが撫順炭鉱を襲い、それに対し関東軍は平頂山に全村民を集め機関銃で皆殺しにした上、撫順周囲 10 ㎞の村を焼き払い、300 人を虐殺しました。この死体を埋めた場所が「万人抗」として残されています。

'37.12 には満鉄の重工業部門を切り離し、日本産業（日産）を中心とするコンツェルン「満州重工業開発（満業）」を発足させました。このことを主導したのが東条英機や岸信介など満州の「ニキサンスケ」といわれる人たちです。

匪賊

反満抗日ゲリラ（匪賊）とそれを支援する民衆は、占領軍である関東軍にとって最もやっかいな存在でした。匪賊とは徒党を組んで殺人・撩脱をする盗賊の意味ですが、ここでは非正規の反満抗日の軍事行動をするものをいい、多くは中国共産党指導の遊撃隊でした。図説満州に掲載の匪賊出現及び討伐効果表によりますと、’35 には 39000 回出現し、1 日に 100 回以上出現しています。これに対抗するため関東軍は常時 3 個師団で討伐を繰り返すとともに、「保甲制度（隣人同士の監視制度）」や「集団部落（日本版ゲットー）」などの対策を講じました。

両親渡満

満州帝国成立の後、日本では’36.2 に陸軍の派閥抗争によるクーデター未遂事件である 2.26 事件がおき、その後は政治が軍の言いなりになってゆきました。’37.7 に、北京郊外の盧溝橋付近で日本軍と国民政府軍との小競り合いである「盧溝橋事件」がおき、これを機に日本軍は中国侵攻を始めました。宣戦布告なき日中戦争の始まりです。

このような中、’38.3 に父は大学を卒業し、結婚して夫婦で養子になり、満鉄調査部に入社しました。その 5 月に脳梗塞を発症し、その後遺症で、8 月の徴兵検査で帰されました。翌年 5 月に関東軍が勲章ほしさにノモンハン事件を起こし、壊滅的敗北を喫しました。

北京　盧溝橋付近の宛平城　日本軍がこの城にいた国民政府軍を攻撃し奪取したことで、日中戦争が始まった。

’41.4 に日ソ中立条約が締結され、6 月に私が奉天（今の瀋陽）で生まれ、12 月に太平洋戦争が始まりました。’43.4 に、父が満鉄龍江牧場に配置替えとなり、私たち一家は、ソ連侵攻まで、牧場のあった、現在の黒竜江省チチハル市フラルギ（哈爾浜の北西 280 ㎞にあるチチハル市街地の南西 35 ㎞）で過ごし、妹が生まれました。この間に'42.8 にガダルカナルが陥落し、'43.1 にスターリングラードでドイツが敗退しました。'44.7 にはサイパンが陥落し、当時 53 万人いた関東軍兵士のほとんどが南方作戦に投入されました。そこで在満適

齢男子 35 万人中 25 万人を招集する「根こそぎ動員」が'45.6 に行われました。父も応召しましたが'38 の時と同じく、8 月 6 日に帰されました。

'44.3　**龍江牧場にて　筆者 3 歳**

引き揚げ

'45.8.9 に、日ソ中立条約がソ連から破棄され、ソ連軍が満州に侵攻してきました。我々一家は 8 月 13 日にチチハル市街地に避難し、国民政府軍と中共軍の狭間いたことと、日本敗戦後の混乱で在外邦人の帰還業務が始まらないことから、翌年 7 月までここに滞在しました。

チチハルではソ連兵の強盗に遭い（日本人から物品を強奪することが、ソ連侵攻の目的の一つだった）父は時計などをとられ、母は頭を坊主にして妹('41 生まれ)を抱いて押し入れに隠れていました。両親は知り合いの満人(中国人)から牛乳を手に入れ、いろいろなものを作り売って糊口をしのいだそうです。また長期滞在で、越冬するため、暖房用燃料確保に苦労したそうです。

'46.8~10　3 ヶ月かけて、チチハルからコロ島(島ではなく地名)まで 1200 ㎞を、多くは徒歩で、列車に乗れても無蓋車か時には全く囲いのない貨車で移動しました。哈爾浜の北を流れる松花江も徒歩で渡りました。コロ島でアメリカから貸与された戦車揚陸艦に乗船し、10 月 21 日に佐世保に上陸できました。

船の中では、大人たちが壁に貼られた地図を前に、どこが焼けたかを話していたのを覚えています。また、船内でなくなった方の水葬を、大人の後ろから見たような記憶もあります。佐世保では頭から袖の中まで DDT で真っ白にされました。

そして父の実家のある京都を経由して東京に帰宅できました。

引き上げの悲劇

前述した開拓団の人々は、ソ連への体裁・船腹の不足・本土での食糧難を理由に、関東軍から侵攻を知らされないままソ連兵に略奪暴行を受け、暴徒化した土地を取られた中国人らに襲われました。この人々には「根こそぎ動員」で青壮年男子が不在でした。このような中で死の逃避行や集団自決も起きました。終戦時在満日本人は 195 万人中 17.6 万人死亡しましたが、開拓団員は 27 万人中 8 万人約 30%が亡くなりました。そして残留孤児が 2500 名、

残留婦人が 4000 名(いずれも推定)います。

ソ連は戦後復興とシベリヤ開発のため関東軍兵士の捕虜のほかに、「男狩り」で集めた民間人を含めて 57.5 万人をシベリヤに送り抑留し、内 6 万人近くを死亡させました。

私たちが逃避行をしているとき捕虜となった兵士と思われる人々を乗せたトラックから、乾パンの入った袋を投げてくれたのを覚えています。たぶんこの人たちは、捕虜収容所に行けば食料は与えられるからと思い投げてくれたと思っています。

捕虜を使役することは、国際法違反であり、そのことを指摘されたスターリンは、'56.12 までに抑留者を帰国させました。

私の引き上げの三つの幸運

1．父が脳梗塞を患いその後遺症が足に残り、兵隊に取られずにすみ、男手のある一家四人で引き揚げられたこと(父は生前よく「人間万事塞翁が馬」とか「禍福はあざなえる縄のごとし」といっていました)。
2．父が満鉄社員で、引き揚げ経路が満鉄の幹線沿いであったため列車の運行情報の入手や社宅の利用ができたこと。
3．父の実家が京都であり、岡本の家が東大の近くで、いずれも空襲を免れ、帰ることができる家があったこと。

があげられます。

この体験を纏めて考えたこと

この戦争で、日本では 310 万人（15 年間、1 時間で 23 人）が、原爆、空襲、引き揚げ、戦闘でなくなっています。このうち 230 万人は軍人軍属ですが、その六割の 140 万人は餓死しています。また中国では 1 千万人から 2 千万人が犠牲になったといわれています。

この悲惨な戦争が終わって 70 年間、憲法 9 条の存在が平和を保ってきました。自衛隊が存在し、いくつかの特別措置法の下に海外に派遣されましたが、一人の外国人も殺さずにきましたし、戦闘で自衛官が死ぬこともありませんでした。

しかし、'06 に教育基本法が改正され、防衛庁が省に昇格し、改憲のための国民投票法が検討され出しました（'07.5 に成立）。そこでこの流れを少しで求めるため、'07 に「東広島九条の会」の立ち上げに参画しました。この会の例会や、若手メンバーによる読書会、この一年半に見た新聞やテレビの解説などから、九条改変阻止以上に、憲法が国を縛るという現行憲法の「立憲主義」を絶対に変えてはならないことが解りました。

今の内閣になって'13.11 に国家安全保障会議（日本版 NSC）を創設し、翌 12 月にこれと一体となる「特定秘密保護法」を成立させ、'14.4 に武器輸出三原則を撤廃して防衛装備移

転三原則に換え、同年 7 月 1 日には集団的自衛権の行使を容認する閣議決定を行いました。憲法九条があるにもかかわらず、戦争のできる国にしようとしています。この解釈による九条改変は、国会の承認を受けていません。またこの閣議決定を具体化するには、自衛隊法などの安全保障法制の整備をしなければなりませんが、それは一斉地方選挙後に先送りされています。

我々国民を権力から守るのは憲法であり、国民の持っている最大の武器は選挙権です。閣議決定が具体化する前に地方選挙があります。この選挙でこの閣議決定に対する民意が示されれば、戦争のできる国への流れはかなり押しとどめられると思います。地方選挙ではありますが、国の方向につながる選挙と考えて、必ず投票に行って下さい。

投票に行くということは、意思を表示するということです。意思を持つためには日頃から関心を持って情報を得、考えておかなければなりません。それには周りの方々と、これらの話題で話をするのが、手っ取り早い方法だと思います。「幸運な引揚者」が、皆さんの話題の材料になれば、幸いです。

参考にした本

『図説　満州帝国』太平洋戦争研究会　河出書房新社　1996 年
『満州鉄道まぼろし旅行』川村湊　ネスコ　文藝春秋　1998 年
『中国からの引揚げ　少年達の記憶』　中国引き揚げ漫画家の会編
ミナトプレス　2002 年
『昭和史　1926-1945』　半藤一利　平凡社　2004 年
『満州の終焉』　高碕達之助　実業之日本社　1953 年

(本稿は 2015 年 2 月 17 日に行われた TSS 文化大学における講演の概要です。)